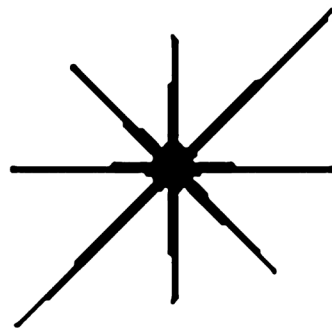


コミット通信 36

[23年7月号特別付録(1)]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

塔の7日間

—旅のみやげ6

野村喜和夫

1日目、夕刻、豚は渴きの9階で育っている、と誰かに囁かれて、同時に塔が見え始めた、ああ、あの塔に行くのだ、しかし塔はほかの建物に隠れて見えなくなり、それでも見当をつけて建物の間を抜けてゆくと、やがてまた塔があらわれて、まるで塔に待たれていたかのようなようだったが、何のために？
豚は渴きの9階で育っている、という声が記憶に残っていて、それと塔とどういう関係があるのか、ないのか、期待と不安とに代わる代わる心を占められながら、ゆっくりと塔に近づき、塔に着いた、私は塔に着いた、見たところ大きな円形のビルで、壁は黄土色もしくは煉瓦色、夕陽の当たっている部分が黄土色に輝き、影になっている部分が煉瓦色にくすんでいるのだったが、視線を上げると塔はやや円錐状の形をしている、つまり上へいくほど狭まっていて、いちばん広い地上一階での直径はおおよそ50メートルはあろうか、高さもおおよそ50メートル、見上げると首が痛くなるほどの高さだ、ざっと数えて14、5階はある、しかも、斜めに傾いている、塔自体が、ではない、階の重なりが水平ではなく、右肩上がりになっているのだ、それはたぶん錯覚で、つまり、階から階へと外周の歩廊が螺旋を描きながら続いているのであって、それが塔に独特の歪みの印象を与えているらしいのだが、待てよ、と私は思った、どこかで見たことがある、これではまるで、と記憶からイメージを探り出しながら、なおも思った、バベルの塔ではないか、規模こそはるかに小さいが、ブリューゲル描くところの、あのバベルの塔を模して建てられたとしか思えない、その入り口の大きな扉の上に垂れ幕が掲げられていて、**豚は渴きの9階で育っている**、という文字列が読める、おお、幻聴が文字列に昇格したぞ、何かの標語だろうか、あるいは、この塔で行われるアートフェスティバルか何かのタイトルだろうか、いずれにしても、入るしかないので、吸い寄せられるようにして入る、ホテルのエントランスにあるような、ゆっくりと回るガラスの回転扉だ、しかし中は異様に狭く、手前の壁のほかにも何も見えない、いきなり、この先行き止まりに突き当たってしまったみたいで、入り口を間違えたか、そこで戻ろうとすると、呼び止められた、紺のスーツを着た若い女が脇のスリットからあらわれ、歩み寄ってきて、「お待ちしていました」、そうか私は待たれていたのか、うれしくなり、「予約してある野村です」とでたらめに言葉を発して、すると女は微笑みながらうなずいた、そうか私は予約していたのだ、ということは、ここはまさしくホテルなのであり、私は宿泊するためにここに来たのだ、じっさい、私はキャリーケースを引きずっている、「こちらへどうぞ」、言われるままに女の後について、脇のスリットをくぐると、まさしくホテルのロビーそのままの薄明るい空間が広がっていた、チェックインカウンターのようなところに案内されたので、カウンターの向こうの若い男に向かって、「予約してある野村です」と、さっきのでたらめの言葉を繰り返した、すると男は、「バベルの塔へようこそ、一週間のご予定ですね、研修は明日からです」と、きわめて事務的に答えた、そうか私は、何かの研修のために一週間宿泊するのだな、それから宿泊カードに名前と住所を記入し、部屋のカードキーを受け取った、503号室、そこではじめて気づいた、男はたしかバベルの塔と言ったのではなかったか、バベル？ まさかさっきの私の類推通りに？ するとふたたび案内の女が寄り添ってきて、「バベルの塔へようこそ」、やはりバベルだ、すると研修とは、何か言語に関するものだろうか、バベルの塔とは、旧約聖書によれば、天空にまで到達したいという人類の夢を実現すべく構想された壮大無比な塔のプロジェクトだった、「エレベーターはありません、この回廊をそのまま行ってください、ごらん

のように、ゆるやかにカーブしつつの上になっています、しばらくすすむと2階になります」、塔の建造は順調に進んだ、ただひとつの言語が話されていて、意思の疎通がうまく行われていたからだ、ところが、それを天上から見ていた神が、地を這うべき人間が自分のところまで到達したいなんてとんでもない、思い上がりもいいところだ、罰してやろう、そう思って、ただひとつの言語をいくつもの言語に分割して混乱を生じさせた、あちらではギリシャ語、こちらではヘブライ語、というふうにすると思の疎通は滞り、建造はストップしてしまった、「503 ということは、5階ですか?」「ええ、回廊は上になっていますから、だいたい一周すると次の階になっていくのです」「螺旋ですか、ぐるぐると回るわけですね」「そうです、ただし一方通行で、降りることはできません」「えっ?」「ご安心ください、明日の会場はお部屋の一つ上の6階で、明日の宿泊部屋はそのまた一つ上の7階になり、明後日になると会場は8階、宿泊部屋は9階になります、別名湯きの9階と呼んでいますが、豚は湯きの9階で育っている」「えっ?」はじめに私の耳に囁かれた、そしてさっき入り口で眼にした垂れ幕のフレーズそのままではないか、訝しく思う私をからかうように、「豚は湯きの9階で育っている」と案内の女は繰り返した、「別に深い意味はありません、つまり一日二階ずつどんどん登っていけばいいわけです、降りる必要はありません」、降りる必要はない? ということは、このさき、私はこの塔のようなビルをただひたすら上ってゆくのであるか、そんなことをしていたら、それこそヘヴンに行ってしまうのではないか、ありえないことだ、というのも、予定では一週間後にこの塔での滞在を終えることになっている以上、そのとき螺旋を降りる必要が生じてしまうのではないか、どうすればいいのだ、それとも、降りる必要がないことと豚は湯きの9階で育っていることとのあいだには、何か秘密めいた関係でもあるのか、とそのとき、男がひとり、眼の前を猛烈な勢いで逆方向に走ってゆくのが、つまり降りてゆくのが見えた、あとをさらに猛烈な勢いで、監視員とおぼしき若い男ふたりが駆けて行って、こちらからは見えなくなるかろうじて一歩手前で男を捕まえ、もと来た方角へと、男を連れて戻ってきた、「無理に螺旋を降りようとすると、あのようなことになります」、まるで警告するように女は言って、消えた、おいおい、自由はないのか、とあたりを見回すと、螺旋の回廊はビルの外周をめぐるはずだが、外に向けられた窓はなく、だからある種の閉塞感があり、まるで船内に閉じ込められたかのような息苦しさをおぼえる、おかしいな、さっき外から見たときは、多数の窓がヒトのしゃれこうべの眼窩のようにあったはずなのに、と思いながら、螺旋の回廊をぐるぐる登ってゆくと、じっさい、2階になり、3階になり、4階になった、ただでさえ長い道のりなのに、キャリアケースを引きずっての移動なので、かなりきつい、音もうるさい、ともあれ、だいたい螺旋をひと回りすると、階もひとつ増えてゆく感じだった、4階でその内部を覗くと、私と同じようにチェックインした客がフロア内通路にいて、自室のドアを開けようとしているところだった、さらにもうひとまわり外周の螺旋を登ると、ようやく5階で、同一フロア内通路に入ると、すぐに503号室に到着した、部屋にはなぜか鍵がかかっていなかった、ドアを開けると、またドアがあり、そのドアを開けると、真っ暗闇で、手探りで灯りのスイッチを探すがなかなか見つからず、そのうちにひとりで照明灯がついて、部屋全体が明るくなってきた、部屋の大半はベッドで占められている、異様に細長いベッドだ、と思ったら、部屋自体が異様に細長いのだろう、それでシングルベッドが二つ、直列式に並べられているのであって、しかしいったいカップルが泊まりにきたらどういうことになるのか、それと、やはり窓が認められない、旅装を解き、服もパジャマに着替えると、さすがにやや空腹を覚えたが、それ以上に猛烈な眠気に襲われ、そのまま寝入ってしまった、

2日目、灰色の古い塔のようなビルに、今度はいきなり辿り着いた、この上階に投宿先のホテルがあ

り、妻がそこで待っているはずだ、ビルと道路を隔ててなぜか工事用のフェンスがあり、ぐらついていて、私はやっとのことでそれをよじ登り、フェンスと塔のあいだに降り立つ、だがどこにエントランスがあるのか、なんとなく取りつく島のない建物だ、スカーフの女がふたり歩いているので、ついていくと、半周ぐらいしたあたりに、「ヒンドゥーのカトリック」というわけのわからない教会入口があり、どうやらそこがこの建物への唯一の入口らしい、女たちはそこに入っていき、上階に達するにはここしかない判断して、私も入っていく、すぐにインド人らしき男が横たわっていて、ヒンドゥーでは得られない早期の悟りのため修行しているのだという、カトリックで悟り？ ますますわけがわからない、彼をまたぎ越すように奥へ向かう、控えの間のようなところに、べつの今度は日本人らしき男がいるので、彼に訊いてみるが、上階へのアクセス法は知らないという、私は途方に暮れてしまう、とそのとき、目が覚めた、つまり私は、塔のなかで塔の夢を見ていたことになる、いや、塔が私に塔の夢を見させたのかもしれない、いずれにしても、目が覚めた、部屋に窓がないので、いま朝なのかわからない、腕時計は午前8時を回っている、時計が間違っていなければ、とりあえず朝なのだろう、身支度をして部屋の外に出た、そして外回りの回廊に出た、これを登ると6階になってしまうから、まだそのときではないと考え、フロア内に引き返そうとするが、回廊の窓から陽光があふれているのに気づく、おかしい、昨日は外に向けた窓はなかったはずで、何かが狂い始めている、塔か、あるいは私の記憶か、どちらかが狂い始めている、しかしまあ、暗いよりは明るい方がいい、内部の通路を少し歩くと食堂があったので、そこで朝食をとることにした、バイキングスタイルで、私はパンとハムとスクランブルエッグと野菜をとった、遅い時間にきたせいかわりに、私以外に誰もいない、食堂を出て部屋に戻り脱糞し、キャリーケースごと部屋を再び出る、外回りの螺旋回廊の緩やかな勾配を今度こそは登ってゆき、やがて6階になったので、回廊から同一フロア内の通路に折れ、そこを少し歩くと、たしかに会議室がいくつか並んでいて、最初の会議室のドアには「シンポジウム：性に関する探究」というチラシが貼ってあった、バベルだから言語学か何かのシンポジウムだと思ったら、とんでもない、しかしまあ、言語学よりは面白そうだ、中に入り、最後列の席に座る、使用言語はフランス語と日本語らしい、同時通訳のイヤホンが備えつけられているのでそれを耳につけながら、見ると、正面のパネル席に、5人のパネリストが並んでいる、全員西洋人だ、テーブルから名前を記した紙が垂れていて、ブルトンなる者が質問する、「しばらく以前からセックスしていないとする、一晩のうちにいったい何回することができるか、そしてそれに続く3日間にはどうか、毎日セックスができるか？ 1日の例外もなく？ 日に何回できるか？ 12時間で達成した最高記録は何回か？」、プレヴェールなる者が答える、「ぼくの場合、セックスはたいていは1回か2回だね、しない日だってある、スポーツは嫌いなんだ」、ペレなる者が答える、「2回か3回というのが穏当なところだろう、続く3日もほぼその調子だと思う、1年中、毎日できるとは思えない、5時間で9回と言うのが記録だ」、ブルトンなる者が答える、「最初の日は4回、2日目は1回か2回で、3日目は2回か3回、4日目は1回か2回、最高記録？ 5回以上続けてやると、どうしても外に散歩に出たくなる、それもひとりで」、タンギーなる者が答える、「最初の日は3回、続く3日間も3回ずつ、毎日？ それは無理、最高は5回」、それからまたブルトンなる者に発言が戻って、「獣姦はどうだろう、私は好まないけど、ネクロフィリアならやってみたいね」などと言う、私は呆れた、シンポジウムと称して、要するに猥談ではないか、しかも男性中心主義に満ち満ちた、なんとも時代遅れな、と失望しつつ、私は会議室を出た、通路に沿ってほかにもいくつか会議室が並んでいるので、ほんとうに言語学のシンポジウムはないのだろうか、と私は探し始めた、もしくは語学の研修、いや、それは困る、私は語学が苦手だ、そうこうするうちに、いつの間にか時間は経って、ランチタイムになった、いったい何のための午前中

だったのだろう、しかし収穫がひとつあった、同一フロア内通路は建物中央で吹き抜けの空間に出るのだが、そこに、「性に関する探究」の余韻を引くように、むかし私が一方的に捨てた女が立っていたのである、むかしのままの姿形で、まさかと思う間にも、私に情欲がきざしてきた、こう言ってよければ、豚の渴きのように、歳月とは恐ろしい、あれほど女のことが嫌になって、ぼろ切れのように捨てたのに、今はむしろ女にはじめて会ったときのような感覚のみずみずしさを覚えるのだ、「やあ」と私は声をかけた、女は誘うようにはにかんで八重歯を見せた、しかし、私のほうで遠慮して、だってそうだろう、捨てたのだから、後ろめたさがある、それでなんとなく距離をとって通路を歩いているうちに、どこかから鳥が飛んできた、種類はわからないが、まぎれもなく鳥である、まさか、ここは塔の内部であり、鳥など飛んでいるはずもない、という思念に一瞬気を取られているあいだに、はぐれてしまった、女とはぐれてしまった、あれ、おかしい、どこに消えたのだろう、あたりをキョロキョロと見回すが、女はいない、そんなばかな、抱いてもいいと思っていたのだ、こうなると焦慮が増す、ここで待っていれば、向こうから戻って来るかもしれない、いや、こちらから探しに行くべきか、時間はたっぷりある、キャリアケースが邪魔だが、仕方がない、ふたたび出くわしたら、私の部屋に連れ込もう、口実はいくらでも考えられるだろう、私は楽しくなってくる、もうすぐ抱けるのだ、それにはしかし、女と合流しなければならぬ、どうすればいいのだろう、同一フロア内通路を隅々まで歩いたが、合流できなかつた、突き当たりに食堂があったので、私はそこでとりあえず昼食をとった、つもりが、信じられないことだが、もう夕刻になっていた、窓から夕陽が見えたのである、美しい夕陽だった、炎に包まれて沈んでゆく船のような、という比喻は、しかし出来過ぎだろう、と思いながら、女も食事に来るかもしれない、とも思って、食事の後もしばらく待ってみたが、女はあらわれなかつた、仕方なく、外回りの螺旋の回廊に出た、女はここを登っていったのかもしれない、というか、この螺旋は降りられないのだ、降りると罰せられる、ということは、もし女が上の階に行ったら、ここで待っていても、女は戻って来ない、私も登って上の階に探しに行くしかないのである、明日の研修の会場も上だ、往きて還らずか、私は欲望が生煮えのまま、欲望が生煮えのまま、欲望が生煮えのまま、

3日目、707号室で目が覚めた、目が覚める前は、やはり何かの研修で中国のとある都市に来ていたらしく、束の間、ある施設で共同生活をしていたようだ、そして何日目かの朝、集合場所に行こうとするが、建物は学校のように広く、どの部屋に行けばいいのかわからない、誰かに聞けばいいのだろうが、誰に聞いたらいいのかわからない、スマホを取り出してみるが、壊れているのか、うまく操作できない、みんなもう出かけてしまったようで、私はどうやら取り残されてしまったらしい、どこことなく閑散とした建物の中を私は歩き回る、建物自体が半ば廃墟のように変容してしまったかのようだ、排泄の問題もあって、私はそれとなくトイレを探す、見当たらない、そのうちに、私は私自身が荒廃してしまったように感じる、どこで何をすべきなのか、昨日までふだんはどこで排泄していたのか、そもそもこの建物は昨日までと同じ建物なのか、すべてがぼんやりしてしまっている、そう言えば、老いぼれた男が数人、いかにも所在なげにうろついているのが見えるが、私もそのひとりなのか、と思ったところで目が覚めた、昨日はあれからまたも7階の同一フロア内通路を歩き回り、女を探し回ったが、ついに見つからなかつた、ともあれ、今日も研修だ、研修があるのにちがいない、そう思って身支度をし、キャリアケースを転がして部屋を出た、そして外回りの螺旋の回廊を登って8階に行くと、ほどなく、昨日と同じように会議室があらわれ、ドアの前に「塔学会」とあった、そんな学会があるのか、だが、あるとすれば、このバベルの塔で開かれてこそふさわしいではないか、塔のなかで

塔について考える、そう、メタ塔の出現であり、昨日の「性に関する探究」よりはマシかもしれない、もしかしたら私自身が「塔学会」の会員なのかもしれない、そう思ってその「塔学会」のドアを開けると、すでに議論は白熱していて、白熱が議論しているようだった、塔のなかで塔について議論することの意味について、無意味だという者と、非意味だという者と、未意味だという者とがいて、無意味だという者は非意味になるまで議論しなければならないというし、非意味だという者はいくら無意味を重ねても非意味にはならないというし、未意味だという者は、無意味も非意味も到底未意味に到達することはできないし、それこそ議論すること自体が無意味だというし、すると無意味だという者は、私の無意味という言葉を手勝手に使うな、失礼ではないか、まだ意味にもなっていないくせにというし、こうして白熱が議論しているのだったが、埒が明かないと私はみて、つぎの会議室に行く、ここもやはり「塔学会」の続きなのか、ちょうどある者が「さざえ塔について」というタイトルで発表し始めていたので、最前列の席に座ってそれを聴く、彼あるいは彼女は彼女いわく、「ときおり世界について考えることがありまして、でもまあそんなに深く考える必要はなくて、さざえ塔、そうそれはさざえ塔と呼ばれます」、すかさず私は尋ねる、まだ質疑応答の時間ではないはずだが、私は私の好奇心を抑えることができない、「さざえって人の名前ではなく、栄螺のことですか、巻貝の一種の」、「そうです、つまりその栄螺のように螺旋を巻いているんです、外から見るとなんの不思議もない六角五重の木造の塔なのですが、ほら、こんなふうに」、そう言いながら、彼あるいは彼女は、手元のPCを操作して背後のスクリーンにさざえ塔の画像を映し出した、「こんなふうに、何の変哲もありません、でも入ってみると、通路が右斜め上方へ上方へとゆるやかな傾斜をなして続いていて、辿っていくうちに、ぐるぐると内部のへりを回っているような気がして、そうかこの通路は螺旋をなしているのだということがわかりました」、私は話を遮る、「この塔と同じだ」、「ええ、螺旋だとわかると、まるで自分までもがぐるぐるとねじ巻き状に絞りあげられて行くみたいで、てっぺんではどんな眩暈に待たれていることだろうと思ううち、いつの間にか通路は、右斜め下方へ下方へと傾斜の向きを変え、まるでさっきまでねじ巻き状に絞り上げられていた自分が、今度はゆるゆると同じねじ巻き状に緩められ解かれてゆくみたいで、降りて降りて、気がつくとき裏口に出てしまっているんです、ああこれが世界というものなんだと、私が言いたいのは、つまりわれわれがいまいるこの塔も、さざえ塔がモデルになっているのではないか」、私はまた尋ねる、「ということは、われわれもいつかは自然に螺旋の通路を下ることになって、外に出てしまう?」、彼あるいは彼女は答える、「たぶん」、私はなおも問う、「まるで人が母親の胎内から外に出るように?」、彼あるいは彼女は答える、「たぶん、ではこれで私の発表を終わります、ご清聴ありがとうございました」、パラパラと拍手があり、それから司会者とおぼしき男が私の方に目配せした、私の番らしい、そのときになってはじめて、私は何も発表の準備をしていないことに気づき、愕然とする、思えば、これまでの私の人生というのが、いつもこんな調子だった、いつも準備不足だったり、人に遅れをとってしまったり、到着したらもうすでにイベントが終わってしまっていたり、今も、口から出まかせに話すしかない、「塔、塔ですよ、ね、ロンドン塔とかエッフェル塔とか、ふたつは全然違いますね、ロンドン塔は石で出来ていて、エッフェル塔は鉄で出来ていて、隙間だらけで、東京タワーも鉄の塔ですが、エッフェル塔に比べると軽いというか、キッシュというか、しかし塔は二つあるのがいいのではないのでしょうか、眼だって耳だって、肺だって腎臓だって、いや睾丸だって卵巣だって、みんな対になっているでしょ、塔もだから」、ここでしかし、私の発表は中断を余儀なくされた、なぜなら、またも鳥が飛んできたからである、鳥だけはこの塔のなかを自由に行き来できるらしい、見たところ大型の鳥で、アホウドリかもしれない、会場はざわめきたち、鳥を捕獲しろ、渴きの9階に行かせるな、などと怒号が飛び交い、おかげで私の発表のノル

マは雲散霧消、そのまま私は会議室を出て、ありがとう鳥、昨日は私の欲望の邪魔をしたのに、きょうは助けてくれたね、しかしその後の記憶がない、

4日目、908号室で目覚めた、ここはどこ、私はだれ、というふうを目覚めて、何しろ記憶が飛んでいるのだ、昨日「塔学会」での私の発表の途中で鳥によぎられてから、どこで何をしていたのか、まるで泥酔した翌朝のように、全く思い出せない、いやそれ以前のことも、ぼんやりとしか思い出せない、あるいは鳥が、私の海馬の一部を餌か何かのようにさらっていったのだろうか、唯一その鳥の影が、まだ眼の裏に張りついている感じがする、ただ、数分後に、ここはバベルの塔であり、私はそこに研修に来ている何者かである、だから今日も研修があるのだろうと、その程度には記憶が戻ってきた、そこで、起きて顔を洗い、服を着替えて、部屋を出ようとしたそのとき、その部屋が908号室であることを知り、**豚は渴きの9階で育っている**、その9階に自分は今いるのだ、と気づき、さらに、きょうの研修について何の情報も与えられていないことに気づいた、あるいは昨日、どこかで誰かに与えられたのだが、それを私は忘れてしまったのかもしれない、そこで、研修はもう終わったのだと勝手に判断してしまうことにした、振り返るまでもなく、研修の成果はほとんどない、そもそも、研修を受けるためには、塔において私とは何者なのか、何者になろうしているのか、わかっているかなければならないはずだが、塔に入ったそのときから、それがあやふやなのだ、まるで研修というシニフィアンが先行して、そのシニフィエはどうでもいい、あるいは、少なくともかなり後からついてくる、とでもいうかのように事は進んでいる、と考えていいのか、ともあれ、食堂に行って朝食をとり、また部屋に戻った、することがないので、はぐれてしまった女との久しぶりの情交を先取りして自慰をしたり、というも、私は女との合流を諦めてしまったわけではないのだ、それからテレビをつけてゲーム画面を出し、昔懐かしいテトリスというゲームをしたり、中断してしまった塔についての私の発表の続きを考えてみたりした、塔は対になっているべきで、ツインタワーですね、善の塔の隣に悪の塔があり、優美な塔の隣に剛直な塔が立っている、いや、ひとつの塔でも、その内部でいつの間にか様相が一変しているような、そういう塔のほうがスリリングではないでしょうか、そういえば、と私は夢想を中断した、この塔も、上に行くにつれて荒廃しているようにみえる、最初にそのことに気づいたのは、7階で女を探し回ったときである、5階で女と出くわしたのと同じ建物中央の吹き抜けの空間に出たのだが、5階の吹き抜けとは様相が一変して、それはまるで、ピラネージの絵のなかに迷い込んだかのようなだった、ピラネージ、18世紀のイタリアの画家だ、牢獄と題して彼が描いたところの、崩れかけた階段や途中で終わる橋梁や何やら処刑機械のようなものが層々と積み重なるあの奇怪な建物の内部、それがこの塔にも幾分か規模を小さくして穿たれたかのように、塔のいわば芯の部分はこんなにも荒廃しているのか、とそのときは思ったが、その吹き抜けの荒廃が、次第に上の階の吹き抜け以外の部分にも及ぶようになったのだろうか、というも、908号室を出て9階の同一フロア内通路を歩いていくと、朽ちかけた研究室のような細長い空間があらわれた、ドアは取り払われている、なのでそのまま足を踏み入ると、壁の両側は書棚になっていて、まるで地震のあとのように、そこから夥しい数の本が雪崩れて床を埋め尽くしていたが、目を落とすと、ほとんどが言語学や言語教育関係の文献だ、そのなかに「バベル言語学会会報」という雑誌が何冊もあることに気づく、そうか、かつてはここがバベル言語学会の本部か何かだったのだろう、そして言語学や各国語をめぐる研修やシンポジウムも行われていたにちがいない、じっさい、その黄ばんでぼろぼろになった雑誌のひとつを拾ってページを繰ると、「発表要旨（日本語）」とあって、「**豚は渴きの9階で育っている**、そして人から獣が這い出すように、音楽も渴きである、そのようなものとして、音楽は言語

以前から存在し、だから言語は、バベルは、おまえらの脳が発達する過程で生まれた音楽の特殊形態にすぎない」云々と読める、「発表要旨」の文体に「おまえら」とはあまりにも似つかわしくない人称だが、言語が音楽の特殊形態にすぎないとは、ずいぶんと大胆な学説ではないだろうか、ついでに、たかが日本語の漢字表記の問題だが、なぜ水の母と書いてクラゲなのか、なぜ海の月と書いてもクラゲなのか、ふとそんなことまで気になり出し、しかしそれ以上に、**豚は渴きの9階で育っている**という、この塔に到着以来の謎めいたフレーズが、こんな古い雑誌にも、まるで入れ子のように組み込まれていることに、私は軽い眩暈を覚えた、その眩暈のまま、一日を過ごしたような気がする、その眩暈のまま、私は昼に食堂でカツカレーを食べ、その眩暈のまま、窓の向こうにひとひらの海がみえ、それが女の回転する乳房に変わり、その眩暈のまま、すれちがう人影から聞き慣れない言語で話しかけられ、私は言葉を返すことができず、それが何かこの研修にとって致命的なミスだったように思われ、その眩暈のまま、午後にはなぜか発熱した、ひどく発熱した、その眩暈のまま、とある壁に架けられた絵が、女の股間をリアルに描いたクールベの「世界のオリジン」の複製かと思われたが、それが動画のように、プロジェクションマッピングのように動くのをみた、つまりそこから血まみれの赤児の頭が生まれ出ようとしていて、「生まれるな」とその頭を膣内に押し戻そうとする男の手があって、その手は、よくみると私の肩から出ているのだったが、そんな馬鹿な、発熱のせいにちがいない、それでフロア内にクリニックがあるかどうか探した、まさかこんな荒廃したフロアにあるとも思われないが、もしかしたら私は、塔への到着のあと、何かの感染症にかかってしまったのではあるまいか、たいていの感染症はまず発熱から始まる、それから咳が出たり、発疹が見られたり、痙攣が起こったり、呼吸が困難になったりと、つぎつぎと恐ろしい事態に見舞われて、ついには死に至るのではないか、だからクリニックを探さなければならない、なんとしても、どんな犠牲を払っても、たとえ死出の旅の途上であっても、クリニック、クリニック、とその言葉が反復強迫のように私の心を占めて、ほとんどパニックになりかけたが、しかし同時に、待てよ、クリニック、パニック、おお、韻を踏んでいるのではないか、私は詩人だ、いやラッパーだ、と急に陽気になり、クリニックなくとも、パニックよ在れ、ここの肉、その肉、こねこねこねっば、こねこね肉っば、などと高揚するうち、夜になり、遠く人語のざわめきが聞こえ、それがまるでバベル以前のただひとつの言語のざわめきのように、不思議と心地よく、塔に到着して初めて穏やかな気分になり、滲み入るような闇の優しさを感じつつ、ついでに、熱もいつの間にか引いていた、

5日目、昨日と同じ908号室で目が覚めた、その前に例によって夢をみた、それを記しておく、眼の下に摺鉢状に崖が広がっている、崖は段々になっていて、私はそこを降りてゆく、足場をひとつひとつ確保していくと、不思議に容易に降りられるのだ、底まで達して、しかしそこにいつまでもいるわけにはいかない、今度は登るしかないのだが、降りてきたはずの足場がうまく見つからない、取りつく島のないような岩場を前にして、私は途方に暮れてしまう、底のどこかに地下通路への扉があって、そこを通ればもといた場所に出られるのではないか、しかし底は完璧に塞がっている、やはり岩場を登って戻るしかないようなのだが、足場になるような広がりのある段々は見つからない、この上はほんとうの岩登り、手足を使うロッククライミングのようなことをしなければ、この岩場は登れないのではないか、壁面の個人戦という言葉が浮かび、私は絶望的な気分になる、そこで目が覚めた、しかし考えてみれば、摺鉢状の崖とは、このバベルの塔を逆さまにして地に埋め込んだみたくはないか、そう言えばダンテが描いた地獄も、バベルの塔を逆さにしたイメージだと、誰かがどこかで書いていなかったか、と古い読書の記憶を辿り、ところで、9階より上はないのだろうか、最初の日に

言われたように、1日に2階ずつ登るのであれば、けさは11階で目覚めていなければならないはずなのに、昨夜はどういうわけか同一フロア内通路から外回りの回廊に出ることができず、仕方なく、前日泊まった908号室に戻ってきたのだったが、豚は渴きの9階で育っているという謎めいたフレーズが思い出され、不安になった、まさか私が9階に留め置かれたまま、豚のように飼育されていくのだろうか、ともあれ朝食を取ろうと、支度をして部屋を出ようとする、ドアと床の隙間に紙の伝言が挟まれてあり、何ともアナログな通信方式だが、読むと、昨日はどうされましたか、8階の研修室にはお見えになりませんでした、今日と明日はクールダウンです、この9階のスパかジムに行って、とにかく体を休めたり鍛えたりして、塔の外への出発に備えてください、とあった、何の研修かもわからないうちに、もう研修は終わったのか、そんなことを考えながら、部屋の外に出た、通路を歩くと、右がジム、左がスパ、とあるので、私は左を選んだ、塔は上へと行くにつれて荒廃しているとさきに書いたが、ここも、見たところかなり老朽化したスパという感じで、入り口には「水の永劫へようこそ」とある、水の永劫？　ここは渴きの9階ではないのか、わけがわからないと思いながら、中に入るとすぐに脱衣所があり、何人かの先客がいた、びっくりしたのは、男女の区別がないということだった、男も女も入り乱れて脱衣している、私もその中に加わったが、それぞれ、別に興奮するでもなく、恥ずかしがるでもなく、不思議に男であることが荒廃して、女もまた女であることが荒廃して、つまりここでのキーワードは依然として荒廃ということだ、性の荒廃、と言ってもいいかもしれない、それはあのマッチョな「性に関する探究」シンポジウムよりマシなのか、マシでないのか、脱衣の後はシャワーだった、これも壁の錆びたノズルからお湯がちょぼちょぼ出ているにすぎない代物で、中年の女がひとりそのお湯で股の汚れなどを落としていたが、私もそれをまねて、股の汚れなどを落とした、それから急に空間がひらけ、プールのような水槽に一面の水が広がっていた、ぬるぬるする床の上を歩き、水槽のへりに達して、水に手を浸すと、おお、生温い、私はそのまま足からゆっくりと全身を温水に浸していった、するとおお、なんと心地良さだろう、まるでこれはいつか浸った温水だという記憶の脂までもが溶け出していて、本能が作動したというように私は泳ぎ始めた、もう何年も水泳なんかしたことがないのに、不思議と泳げる、それもそのはず、水の永劫は水だけではできていない、たくさんの人の皮膚や肺胞のキララも溶けている感じで、つまりそれらと一体化して、それらの一部となって、自然に運ばれてゆく感じなのだ、十数メートル先の水槽の果てまで行って水から上がると、なんと私は、全身から琥珀のような水滴を滴らせているではないか、それから脱衣所に戻り、服を着て、しかしなんだかひどく疲れ、ひどく歳をとったようにも思われて、同一フロア内通路を歩きながら、このどこがスパだよ、と悪態の一つもつきたくなって、なおも歩いていくと、どこからか獣臭い、いや糞尿の臭いがしてくる、その臭いに誘われるままにとある部屋に辿り着き、ドアを開けると、VRで覗くように、キーキー、あるいはザーキー、豚とおぼしきピンクの生き物のアバターが泣き喚いていた、そこに私も封じ込められて、キーキー、あるいはザーキー、ここは胎内かよ、と思えるほどに、誰か、外からの誰かから生き延びを視認されているのだった、まさかそんな、封じ込められていたのは私のアバターで、その生き延びを、ほかならぬこの私が、ドアのところで視認していたのだ、いや、それでは合理的すぎる、この塔に合わない、視認したのも視認されたのも、この私でなければならぬ？

6日目、もう何階かもわからなかった、11階か12階か、あるいはもっと上か、いつの間にかキャリーケースもない、どこに置いてきてしまったのだろう、908号室か、スパの脱衣場か、メタバースのような部屋の入り口か、しかしもうどうでもいい、あの中には着替えの衣類ぐらいしか入っていなかったの

だから、どうでもいい、それよりも、生き延びを視認し視認されたあと、惑乱のまま空間を転げまわり、飛び跳ねまわり、闇のなかのダンサーのように、あるいはダンサーのなかの闇のように、遠い雷をほどき、彗星と葡萄を会わせ、おお、ポエジーではないか、生き延びの視認がこの悦ばしき境地を生んだのであるか、しかし私は私であることをかろうじて維持して、きょうはもう眠ろう、するとタイミングよく部屋があったのでそこに入り、一夜を明かしたのにちがいない、そしてもう何階かもわからなかった、ただひとつたしかなのは、この階がさらに荒廃していたということだ、同一フロア内通路はもはやなく、部屋から部屋へと突き抜けていく構造になっていたが、それぞれ、塔内外の市場や流通から漏れ落ち、いつしか時間が止まってしまったというような、そして静謐な空気だけを詰め込まれたというような、そういう廃墟の空間がつつぎとあらわれた、それはまるで、廃墟見本市として、町中の廃墟をここに移築して、あるいはそのレプリカを作って展示したかのようで、いや、じっさいそうだったのかもしれないが、スペクタクルとしてそれは面白く、私は眼をみはった、たとえば、壁紙がかすかに差し込む日の光に照らされて、往時の華やかさを蘇らせている部屋、かと思うと、床いちめん草に覆われ、内部に野原をかかえてしまったような部屋、ビーナスの誕生を思わせる巨大な貝殻を模した回転ベッドが、まるで放心したように、来ないカップルを待ちつづけている部屋、がらんとした空間に手術室の巨大な无影灯だけが残っている部屋、体育館とおぼしき規則正しく並んだ窓枠のガラスのこごとくが割れてしまっている部屋、さらには、なんと遊園地のスクリーコースターの螺旋があり、奇妙な生気を帯びながらも静かに朽ちている巨大な部屋、エトセトラ、エトセトラ、そうして誰か外から生き延びを視認されているような、昨日のあのときのことがよみがえり、かつては教会堂だったのだろう、水浸しの床に映し出される天井の幾何学的リズムが美しい部屋があらわれた、めずらしくそこには人がいて、黒づくめの服に十字のペンダントを掛けている、牧師だろうか、私はその男から、目の前の椅子に座るように言われ、座ると、あたかも死の説教のような言葉を浴びせられた、研修はもう終わっているはずだが、それとも、これこそは研修のハイライトであろうか、「あなたの在りし日によこそ」と彼は言った、「えっ」と私は驚いた、「私の在りし日?」「そうです、以下、こんなふうに関答はつづいた、「あなたは死を恐れている」「たしかに、しかし誰だってそうじゃないですか」「それは死を未来に設定しているからです」「もちろんですよ、いつか死は必ずやってくる、だから怖い、違いますか」「違います、ハイデガーは死を先取りするようにして生きろと言いました、でもそれではまだ死を克服するに十分ではありません、さらに死を先取りして、死を在りし日へと取り込んでしまえばいいんです、するともう時間は流れません」「はあ」「いいですか、私たちはすでに死んでいる誰彼の写真を見て、在りし日の××の姿、などとキャプションをつけます、でも、終わる生があり、始まる在りし日がある、というのではないのです、終わる生よりもさきに、在りし日にいわば先回りさせてしまうのです、時間はもう流れません、喜ばしくもあなたは、いわば時の琥珀に封じ込められます」、いったいこの男はほんとうに牧師なのか、「じっさい、あなたはすでに、この塔の中で、幾分かあなたの在りし日にいました、スパで琥珀の滴を垂らしたでしょ、それから、昔の女と再会したでしょ、そんなことは普通の人生の流れの中では起こり得ないことです、だってその昔の女はもうすでに死んでいるのですから」「えっ」「間違いありません」「ということは、私は女の亡霊に出くわした?」「いいえ、そうではありません、だいいち、亡霊だなんて思わなかったでしょう、情欲が湧いたのですから、思わなければそれでいいんです」「はあ」「いずれにしても、在りし日を求めるには、場所と記憶の和を二乗したものを展開して、場所の二乗と場所と記憶の積の二倍と記憶の二乗との和にすればよい、というものでもありません、わかりますよね」「ええ、なんとなく、でも、あなた、ここの牧師ですよ」「そうです」「だったら、説くのは在りし日じゃなくて、ヘヴンでしょ、

ヘヴンに至る道でしょ」「ヘヴン？ 蠅がヴンヴン飛んでいる、ヘンに明るい場所？ さあもう行きなさい」

7日目、あれからじっさい私はどこかに行き、最終の何かをしたのだろう、蠅がヴンヴン飛んでいる、ヘンに明るい場所にも行ったかもしれない、しかし気味が悪いほど誰とも出くわさなかった、まるでこの塔から人がごっそり引いてしまって、私だけ取り残されたかのような、無人、どこまでも無人、それから眠りに就き、夢もみず、目覚めて、どうやらそこが最上階らしかった、天井の代わりに青空が見えたからである、あたりを見まわすと、そこはまさに、建設の途中で放り出されたまま、歲月だけが流れたという感じで、足の踏み場もないほどの瓦礫、剥き出しの錆びた鉄筋、朽ちかけた足場、ギザギザのコンクリートの壁、そこに立てかけられた手押し車、その脇に乱雑に積み上げられた煉瓦やタイル、その向こうに博物館の恐竜の骨のような放置されたクレーン、などなどが、まぎれもない廃墟の風景を作り上げていた、いや、廃墟とは、もともとは何かしらの立派な建造物が時間とともに荒れ果てていったその姿を言うのであって、ここは違う、ただの中断された建築現場ではないか、不思議なことに、瓦礫の隙間から一本のひまわりの茎が伸びて、場ちがいに鮮やかな黄色い大輪の花を咲かせている、ああ今は夏なのかと、このとき私は初めて季節を意識したが、ともあれ、太古の昔のほんとうのバベルの塔の最上階もこんなふうだったにちがいない、空が青すぎて気が狂いそうだ、混沌の色もまた深い青ではないだろうか、風が吹いている、風は塔のめぐりをめぐっている、そうしていっそう、塔の荒廃を促しているようにみえた、いや、風とともに塔は崩れる、風は塔の塵を運んでいる、それだけではない、どこか下方の窓から鳥の群れが飛び立っている、塔の内部に鳥が棲んでいるらしいことはすでに述べた、その鳥だろうか、それはしかし、塔のかけらかもしれない、塔のかけらが、鳥のかたちをして飛び去っているのだ、美しい、美しすぎる、遠い未来のある晴れた日の午睡のなかでみる夢のようだ、と私は思いながら、それでもその場を離れ、最上階から螺旋の回廊に戻ると、上の階がないので当たり前だが、それは下りになっていた、あるいはこれまでただひたすら登ってきた同一の螺旋の回廊を降りたにすぎないのかもしれないが、降りることは禁止されているはずだ、しかし誰も止めにこない、それとも別の降下専用の螺旋を私は降りている？ 二重螺旋？ いったいこの塔はどういう構造になっているのか、そう、さざえ塔だ、塔学会でその存在を知らされたさざえ塔だ、螺旋の通路がいつの間にか上りから下りになっているというあの塔だ、ともあれ、降りるしかない、降りるしかないで降りた、私は降りた、**豚は渴きの9階で育っている**その9階も過ぎ、8階から7階へ、塔学会から性に関する探究へ、以下同様、4階へ、3階へ、誰にも会わない、代わりに、どこから出てきたのか、私のおぼしきキャリアケースが私を先導するように前に立ち、「待てよ」とそれを追ううちに、「待てよ、私のキャリアケースじゃないか、勝手に先に行くなよ」となおも追ううちに、降りる速度にも弾みがついて、あっという間に地上階に出て、しかし初日に通ったエントランスとは明らかに違う、異様にひっそりとした裏口とおぼしき出口から、そのまま、勢いあまって、キャリアケースともども、この世への二度目の誕生のように、「わっ」と塔の外に飛び出してしまった、

* 「シンポジウム：性に関する探究」の箇所は、アンドレ・ブルトン編『性に関する探究』（野崎敏訳、白水社、1992）からの引用。

執筆者について——

野村喜和夫（のむらきわお） 1951年生まれ。詩人，批評家。小社刊行の主な詩集には、『風の配分』（1999年，高見順賞），『よろこべ午後も脳だ』（2016年），批評には、『オルフェウスの主題』（2008年），『[パラタクシス詩学](#)』（共著，2021年），『[シュルレアリスムへの旅](#)』（2022年）などがある。